

報告：境界の彼方、韓国戦争が 想起させる植民地朝鮮

ソウル市立大学校国史学科副教授
朴俊炯（パク・ジュニョン）



一九五一年、朝鮮戦争の最中に在朝日本人の著者による二冊の本が出版された。一つは旗田巍の『朝鮮史』、もう一つは玉川一郎の『京城・鎮海・釜山』である。旗田は植民地朝鮮で生まれ、歴史学者として戦後初の朝鮮通史を執筆。人

間不在の歴史学を批判し、「朝鮮人」を主体とする歴史の重要性を説いた。一方、東京生まれの玉川は、植民地時代に朝鮮各地を転々としており、自伝的な小説を通じてその記憶を描いた。異なる経歴を持つ二人は、著作を通じて何を語ろうとしたのだろうか。

旗田は幼少期を馬山の日本人街で過ごし、朝鮮人を貧しく暗い存在として記憶していた。『朝鮮史』では朝鮮人を「外敵への抵抗と伝統の表現を続けた民族」として描いたが、一九七〇年代に韓国を訪れ、活気ある韓国人の姿に驚く。一方、玉川は植民地朝鮮での経験を、日本人ばかりが住む鎮海や釜山と、多様な人々が混在する京城での体験に分けて考えた。特に京城では朝鮮人の生活や文化に触れる機会が多く、朝鮮

人の日常生活に注目していた。

二人の朝鮮観は三・一独立運動の記述からも読み取ることができる。旗田自身が現場で目撃した三・一独立運動は、老人や子どもまでデモに参加する衝撃的な場面であった。玉川の小説では、隣家の朝鮮人家族との親密な交流が、三・一独立運動によって分断される様子を描く。さらに、『京城・鎮海・釜山』では関東大震災の際に在朝日本人が朝鮮人に対して抱いた不信任感が描かれる。しかし、これらの恐怖は実際の朝鮮人ではなく、日本人自身の植民地統治における加害者意識が生み出した虚像であった。

旗田は外圧に抵抗する朝鮮人を歴史の主体に据えようとしたが、自身の記憶が影響し、同時代の韓国人を理解するには至らなかった。玉川もまた、隣人として朝鮮人と親交を深めたが、独立を求める彼らと向き合うことはできなかった。一方、一九七二年に政治犯救出のため韓国を訪れた山田昭次は、非常戒厳令下で日常を営む韓国人に感嘆した。山田の視線は、境界を超えた世界を垣間見たものだったのかもしれない。

プロフィール

●二〇〇八年ソウル大学校大学院博士課程修了、二〇一二年早稲田大学にて博士學位を取得。ソウル大学校東洋学研究所、仁荷大学校韓国学研究所HK研究教授を経て現職。東アジア近代空間の再編、日本における朝鮮研究などに関心をもち、研究を進めている。「東アジアにおける雑居と居留地・租界」「岩波講座日本歴史」二〇一四「帝国日本の東アジア空間再編と満鉄調査部」（社会評論、ソウル、二〇二二）などがある。